

「……………」

「あなたの氣持が分らないから、それであんなに騒いだけれども、でも矢張り氣の毒ですかねえ。僕さへ忍耐をすればそれで好いんですからねえ。この上あなたまで引張り込んで苦ませたつて仕方がないからねえ。」

「ですけれども……………」

「それに昨日大阪へ電報を打つてやつたの、母が来るつていふから、成可く来て貰はなくたつて好いつて。」

「まあ、何故、母様が来て下さつたら、それに越したことはないぢやないの？」

「いや、母にもこんな弱いところは見せたくはないから……………」

「だつて此場合、そんなことも言つてゐられないわ。」

丁度その時であつた。一人の見知らぬ看護婦が入つて来て、院長の午後の回診を知らせに来た。

「私、茲にゐても好いでせう？」

「好いけれども、早くかへらないと、問題が起つちや困るなあ。」
彼は心底から不安らしい眼付をして言つた。

五二

「先生。」

かう言つて冴子は病室から出て行く院長を廊下で待ち伏せして捉へた。院長は五十近い、頑丈と肥つた、皮膚の色の若々しいほど紅味を有つた男であつた。

「あの病人は、あれでだんだん癒くなりますでせうか？」

「え、お案じになることはありません。」

「でも大分弱つてをりますねえ。」

「弱つてゐます。衰弱が酷いですからねえ。だからまあ安静にしてあけることです。心配な
んぞきかせたり、神経を焦々させるといけませんねえ。それが殊にいけないうです。ねえ。」
院長はここにこして、特にそれを幾度も語つてきかせた。

「それに談話がわるいやうです。さうでせう？ 悪いやうでせう。」
「え。」

「だから外からの面會人は、成可く會はせないやうに注意をなさるが好いでせう。」

「は、ではさういたしませう。何ですか、私達が少し話しをしても、直ぐこたへるやうで御
座いますからねえ。」

「さうでせう。」

「で、手術は受けなくつても宜敷いんでせうか？」

「さうですね、成可くなら水を除つた方が好いんですね。でもまあもう一日経過を見ませ
う。」

「はあ。」

「お大事に……」

かう院長はいつまでも其處に、おなじ話もしてゐられないといふ風にして、頓てその隣
室の患者の方へと入つて行つた。

彼女は引返して、彼の側へ行つて好いか悪いか判らないやうな氣がした。何とも名狀しが
たい淋しさ苦しさ、靜かに靜かに心の底を流れるやうな氣がした。

歸つて行つて好いであらうか、悪いであらうか、茲に於て、彼の折角養つた明るい美しい
氣分を損なつてやるのも嫌であるし、とは言へ、この病氣を見捨て、歸つて行くといふのも
自分の出來得ることでないやうな氣もするし、彼女はこの恐い衰しいヂレンマの中に自ら墮
入つて來た自分が怨めしいやうな氣がした。

とは言へ、茲にかうして時を費やしてゐることは一層恐く怖ろしいことであつた。精養軒
から歸つて來た良人が、自分の行衛を明りと茲と見定めることはいと容易なことであるし、

それを知つた良人は、恐らく今度ばかりは許すも許さないもないといふ氣勢を示して、昨日の佛が今日の悪魔となつて、怨恨と憎悪を向けて来るやうにも思はれた。つひぞ手を振り上げて撲つたこともないやうな順なしい、許すことはよく許す良人ではあつたけれども、けれども今度ばかりは、かくれたる男の本當を現はして、斯様人であつたかと思ふやうな、殘忍な、暴虐なそれを敢てするかも知れないやうにも思はれた。

凶子はそこにちつとしてほられないやうな氣がして、またせかせかと室の中に入つて行つた。歸るにしても、彼の方がまた氣になつて氣になつてならなかつたから……。

五三

心を鬼にして、強い理性の自分になつて、而して彼女は歸つて來たのであつた。その歸り際に。

「歸りますからねえ。」

かう寢てる彼の耳元で囁くと、

「さうですか？」

不圖よびさまされたといふやうにして、彼は幽かに眼をみひらいたが、それなり靜かにまた浅い眠りに陥つて行つた。

「病氣だ、病氣の故だ。」

彼女はそこに薄く涙ぐんだ自分を思ひ出した。

「もうお歸りですか、よくお寢つてゐらしつて、お分りにならないんでせう。」

看護婦はその時さう傍から口を挟んだ。

「え、大分に談をしたものだから、疲勞れたらしいんです。」

「今日でも元氣が良う御座んした。昨日も一日眠つてゐらつしやいましたけれども。」

「さうでしたでせう。」

彼女がかう言つて、靜かにその傍を離れた。けれども、自分が歸つたあとで、ぼつかりと眼を開いた彼が、人知れずそつと邊を見廻しながら自分を探しはしないであらうかと思ふと立去りがたいやうな、言ふに言へない氣持であつた。

無心に眠りつけてゐる彼を見ると、涙のあふれ落ちるやうな淋しみを感じたことを彼女は思ひおこした。あれほどの執着と、愛欲とに悶え苦しんだ彼であつたのに、病氣のためにその苦みを續けることも能ず、自然に反抗することも能ず、熱涙を呑む間から、自然自然にその氣分に入つて行つたのかと思ふと、その病苦の怖ろしさを感じないではゐられなかつた。けれども彼にとつてはそれは最も尊い洗禮の一つかも知れなかつた。この氣持とこの諦めとが、今後永くつゞくものならば、それはしかし何となく期しがたいやうな氣がした。眞實の意味で、修道者のやうな意味でそこに入つて行つたのでないために。

けれどもたとひしばしの間でも、この執着とこの罪業とから離れやうとする意志の彼に湧き起こつて來たといふだけでも、それだけでも二人は救はれ浄められたものではないであら

うか？再びそこに陥つて行くことさへなかつたならば。

そのくせ、彼女は淋しかつた。またもとの孤獨にかへつたやうな氣がした。二人の男に傷を付けて、生々しい傷を負はせて而して自分はまたもとの孤獨にかへつて、行くやうな氣がした青春の終り、歡樂の終りといふやうな氣がした。またもとの平坦な無味な家庭に、善良な妻の假面を被て、而して苦しい、窮屈な生活をつゞけてゆかねばならないやうな氣がした。

かたばみ更紗 終

大正十年六月二十日印刷
大正十年六月三十日發行

金九拾五錢

かたばみ更紗奥附

不許複製



著者 梶本まさを

發行者 三井玉輝

東京芝公園

印刷所 日本印刷興業株式會社

印刷者 山城龍雄

發行所

東京芝公園
振替東京一四一七七

支文社

長篇 小説 月見草

梶本まささを女史著 津田敏子氏装幀

好評 五版 三六版五百三十六頁 定價 金貳圓五十錢

一葉女史以後の天才なり 本書は「かたばみ更紗」の姉妹篇にして梶本女史の出世作なり。曾て一度大阪時事新報紙上に掲載さるゝや文壇の驚異となり多大の好評を博せる空前の傑作にして、幽かに揺めく月見草の如き女性が蜜の如き初恋に破れて自暴自棄となり、黄金を擁せる野獣の如き男に自己の凡を擧げて之を委ね、終ひに嫉妬の毒刃に刺され、後に新生活に入ると至れる悲惨なる生涯を、尤も大膽に描寫せるものなり。本書の眞價に就ては次に掲ぐる文壇諸大家の批評を一讀さるも、如何藝に術味の豊なる名篇なるやを知るを得べし。

モーパーツサンの作を見よう 徳田秋聲氏曰く。月見草は現今の新聞小説の水準から言へば有数のものであらう。作者が極力描寫しようとした奈美子と其旦那の骨董屋との關係などもモーパーツサンの作品を見るやうな深刻さを以て極度の寫實主義を發揮してゐる。

女史の生活が良く書けてゐる 田山花袋氏曰く。私は色々な作品を忠實に讀んだ。中には斯んなものと思はれるもの迄も讀んでみた。併し月見草を讀んで私の心はかなり引つけられた。始めて本當の作に出會したやうな氣がした中にも女の生活が非常によく書けてゐた。而も澤田が女を切りつけるあたりの描寫はいかにもうまく且つ本當であつた。

性格描寫が巧みに出てゐる 佐藤紅緑氏曰く。これは仕ういふ小説かと云へば、或一人の女が数奇な運命に捉はれて苦勞してとどの詰り自秀の旦那である男の爲めに刺されて病院に送られ、其處で命が助かるのでありますが数奇な運命に捉はれた一人の女が今日の日本の社會道徳が悪い爲め日本に道徳が個人の自由を認めない爲め、段々切つても切れない深淵に陥込んで遂に悲惨な運命に達つて病院に送られればならぬといふ著者一流の涙の籠つた小説で、女主人公奈美子の生活が尤も巧みに描いてあります。

その骨董屋との關係などもモーパーツサンの作品を見るやうな深刻さを以て極度の寫實主義を發揮してゐる。

上司小劍氏著 石井鶴三氏裝幀

長篇小説 花

道

新刊 三六版六百二十六頁 定價金貳圓五拾錢

女子學校を出たばかりの若い婦人が新思想の浪に探まれつゝ人生の花道を歩いて世の中の本舞臺にかゝらうとする、最も花やかな道行を描いたもので、戀あり、涙あり、波瀾に富む長篇にして近來の傑作也。

田山花袋氏著 津田青楓氏裝幀

長篇小説 戀

草

新刊 四六版五百頁 定價金貳圓拾錢

文壇の巨匠田山花袋先生半歳苦心の餘になれる長篇傑作なり。傷れる戀に倦ける新妻は、大膽にも一僧侶と熱烈なる戀に陥り夫を捨て家を棄て、罪の子を負ひて戀人の許に走るといふ深刻なる物語なり。

501
94

終

